藻場を回復・維持し、磯根資源を育む

網代港地区海洋環境保全対策活動組織

網代港地区について

網代港地区は、鳥取県の最東北端に位置する岩美町の西側にある。日本海に面する地区には風向明媚なリアス式の海岸が広がっており、その海岸線は山陰海岸国立公園「浦富海岸」として知られる。

当地区は漁業の町で、沖合底びきやイカ釣、一本釣が営まれている。また、サザエやイワガキなどを対象とする採貝藻も盛んである。

藻場の現況

当地区の岩礁域には、ホンダワラ類やアラメ・クロメなどの大型海藻で構成された藻場が広がっている。また、その藻場は採貝藻や一本釣が対象とするアワビや根魚など磯根資源の重要な生産基盤となっている。

しかし、近年、全国的な磯焼け問題が報告されるようになり、当地区においても藻場の衰退が懸念されるようになった。

鳥取県では「藻場造成アクションプログラムⅠ」を平成 16 年に策定し、アラメ種苗の移植を中心とした藻場造成を県内全域で進めてきた。その結果、アラメ群落の形成が促進され、当地区においても大型海藻の被度階級が増加するなど一定の成果を得た。

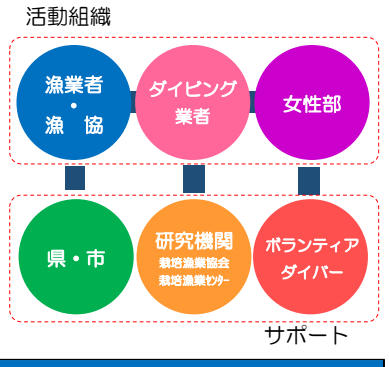
しかし、昨今の猛暑による高水温及びその長期化により、一部のアラメが大量枯死した。また、水温上昇によって温暖性の藻食性生物が増加し、アイゴによる食害やムラサキウニの生息密度が顕著に増加したりするなどの新たな問題が生じており、その対策が求められている。

組織の設立および活動方針

上記の課題のもと、漁業者が中心となって「網代港地区海洋環境保全対策活動組織」を平成 28 年度に結成した。

組織の体制は、漁業者とダイビングショップ、女性部で構成した。

活動方針は、県が作成する「藻場造成アクションプログラムⅢ」に沿って下記の取り組みを行い、地域の藻場の回復・維持を図る。



① ウニ類の除去

活動区域のうち、ウニ類の密度が高い場所で集中的に除去活動を実施し、現存するホンダワラ類やアラメ・クロメ類の維持・回復を図る。

② アラメ種苗の設置

アラメ場の維持・回復を目的に、種苗を設置し、核となる母藻を増やす。また、その手法の技術の確立を目指す。

藻場の回復・維持に向けた取り組み

(1) ウニ類の除去

当地区における藻場の衰退は、高密度で分布するウニ類による食害の影響によるところが大きいと考えられている。

ウニ類の除去は、6 月と 9 月の年 2 回実施する。除去方法は、素潜りで手鉤を用いてウニ類を採り、水揚げし、渡船業者に釣り餌として無償提供する。また、今年度から、当活動とは別に県単事業で、水中でバールやハンマーを用いてウニ類を特定の場所で集中的に徹底除去する活動をダイビングショップやボランティアダイバーと一緒に行っている。

ウニ採り上げ（多面）

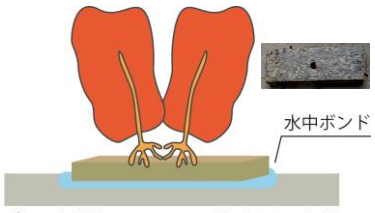
徹底除去（県単）

(2) アラメ種苗の設置

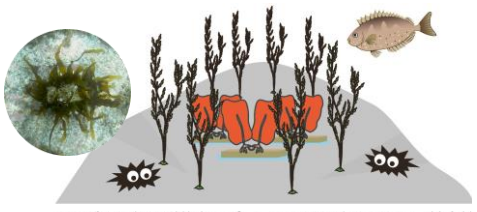
アラメ種苗の設置は、核となる母藻を増やす取り組みで、種苗プレートを用いて行う。

現在用いる種苗プレートは、鳥取県栽培漁業センターが昨年度改良開発した小型の種苗プレート。このプレートは、木毛（もくもう）セメント製で、耐久性は従来のコンクリートより劣るが、軽量で作業性が良く、安価である。また、直接水中ボンドで岩や石に設置することができ、1 日で作業を終わらせることができる。加えて、ホンダワラ類の群落内の隙間に容易に設置でき、これにより種苗の食害を軽減することができる。

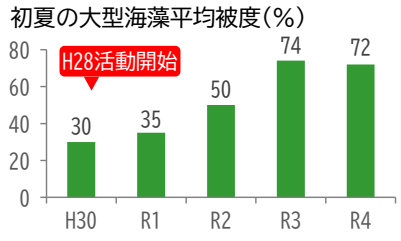
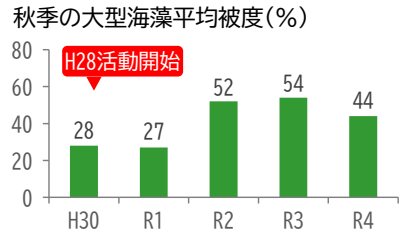
種苗プレートの設置は 6～7 月。また、今年度については、アラメ種苗の夏の高水温による減耗や魚類による食害を避けるために、10 月以降にプレートを設置する試験も新たに進めている。



プレート規格：5×10cm（木毛セメント製）


ホンダワラ類の群落内にプレートを設置することで、植食性動物によるアラメ種苗の食害を軽減させる

活動の成果と今後の方針

平成 28 年度から取り組んできた藻場の保全活動は、現在、アラメやホンダワラ類、ワカメを主体とした大型海藻類が増加傾向にあることから、適正に実施できている。ただし、今年度の夏の高水温や台風の通過で、アラメ場やガラモ場の一部が消失したことから、今後も引き続き藻場の回復・維持に向けた取組を進める必要がある。

また、今年度からスタートしたウニ類の徹底除去や、種苗プレート設置時期の検討試験の効果検証を進め、より適正な藻場保全の取組方法について検討しながら活動を進めたいと考えている。